

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ

平成 4 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 V

平成 4 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 V』は、平成3年度に県園場整備事業に伴って、調査された2地点の調査報告書であります。

調査の結果、下手地点では上位層に陶磁器類、下位層に向って土師器・弥生土器片をはじめ、少数ながら打製石斧等が出土しております。殊に教基の柱穴等の遺構の検出等は、前向きに検討せねばならぬ資料であったと考えております。また、和田地点では山裾という立地性から攪乱を呈しており、けして良好な資料を得たとは言えませんでした。しかし占墳の至近を調査したことから当該の时期的位置付けがある程度なされ、やはり大きな成果であったと言わねばならないでしょう。

本書は、指導を賜った鳥根県教育委員会文化課はじめとして、鳥根大学の田中義昭教授、また作業に携わって献身的に文化保護の翼となっただきました地元の皆さんに支えられて成ったものであります。したがって本書が広く文化財保護の理解につながり、後世に遺していくための一助とならんことを期待しながらご報告といたします。

平成4年3月

匹見町教育委員会

教育長 齋 藤 惟 人

例 言

1. 本書は、平成3年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、鳥根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	鳥根大学法文学部教授	田中義昭
	鳥根県教育委員会文化課文化財保護主事	内田律雄
事務局	匹見町教育委員会教育長	斎藤 惟人
	匹見町教育委員会次長	渡辺 隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	佐々木 厚造
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代
調査補助員	榎田 悦子 大谷 文子 藤村 妙子	大賀 幸恵
調査参加者	栗田 定 原田 禎二 森脇 雅夫	落田 政人
	一編 忠俊 渡辺 照 山崎リマヨ	溝田 久子
	長谷川時子	

3. 発掘調査に際しては、土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 調査地の呼称については、地点の小字名を引用とし、また遺物・遺構の有無にかかわらず「遺跡」という文語は用いずに、全て「地点」という接尾語を附して称することにした。

5. 紙数に伴って、図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は、渡辺友千代・榎田悦子・大谷文子・藤村妙子・大賀幸恵が各分担し、執筆・編集は調査員渡辺友千代が、松本岩雄・内田律雄の指導のもとで行った。

目 次

第1章 匹見の遺跡概観	(渡辺友千代)	1
第2章 下手地点	(渡辺友千代)	4
1. はじめに		4
2. 調査の概要		6
3. 層序と各調査区の概要		6
4. 出土遺物		8
第3章 和田地点	(渡辺友千代)	11
1. はじめに		11
2. 調査の概要		13
3. 層序と各調査区の概要		13
4. 出土遺物		16

挿 図 目 次

第1図 匹見中央部における主な遺跡	3
第2図 下手地点位置図	4
第3図 下手地点配置図	5
遺構計測表	6
第4図 下地点土層断面図	7
第5図 下手地点実測図Ⅰ	9
第6図 下手地点実測図Ⅱ	10
第7図 和田地点位置図	11
第8図 和田地点配置図	12
第9図 調査地点地形断面図	13
第10図 和田地点土層断面図	14
第11図 山伏墓実測図	16

第12図	和田地点実測図Ⅰ	17
第13図	和田地点実測図Ⅱ	18

図 版 目 次

図版 1	1. 南西からみた下子地点近景 2. A調査区北壁
図版 2	1. B調査区北壁 2. C調査区北壁
図版 3	1. 遺物出土状況 (E調査区) 2. 遺構検出状況 (B調査区)
図版 4	1. 陶磁器・羽口・弥生土器 2. 弥生土器・打製石斧等の石器
図版 5	1. 南西からみた和田地点遠景 2. 南東からみた発掘地点の調査区
図版 6	1. A調査区北壁 2. B調査区北壁
図版 7	1. CD調査区北壁 2. 銭貨出土状況
図版 8	1. 北側からみた山伏墓 2. 山伏墓の七坑状況
図版 9	1. 瓦器・須恵器・縄文土器・銭貨 2. 凹石・石臼・礫器

第1章 匹見の遺跡概観

本町は、南東側に広島県、南西側に山口県の2県に接する中国山地の脊梁部に位置し、総面積300.88㎢を測る山間地に存在する。その中国山地に源を發した匹見川は、紙祖川・広見川・石谷川などの町域の各支流を集めて北西の日本海側に注ぎ、可耕地はその流域に僅かに拓けているにすぎない。したがって96%は林野で占められているため、そこには旧くから山地に振向けられた生活があった。

例えば、山葵・椎茸栽培、あるいは製炭・伐採などの林業関係を生業とし、また近世では豊富な広葉樹林を利用して木地・鉦（たたら）節などが活動した場であり、製鉄遺跡は現在でも80箇所を数えている。一方、平地では狭長な河岸段丘の可耕地で水田耕作を営むとともに、山裾の傾斜地においては焼畑として楮・三椏を育成し、紙祖（しそ）という地名のごとく紙業も盛んであった。

また中世における山城跡も16箇所数えるが、山間ということから、その遺跡もしばしば周流する河谷の舌状地の尾根筋に立地する場合が多い。しかも彼らの祖先は戦いに敗れた武将の子孫といい、



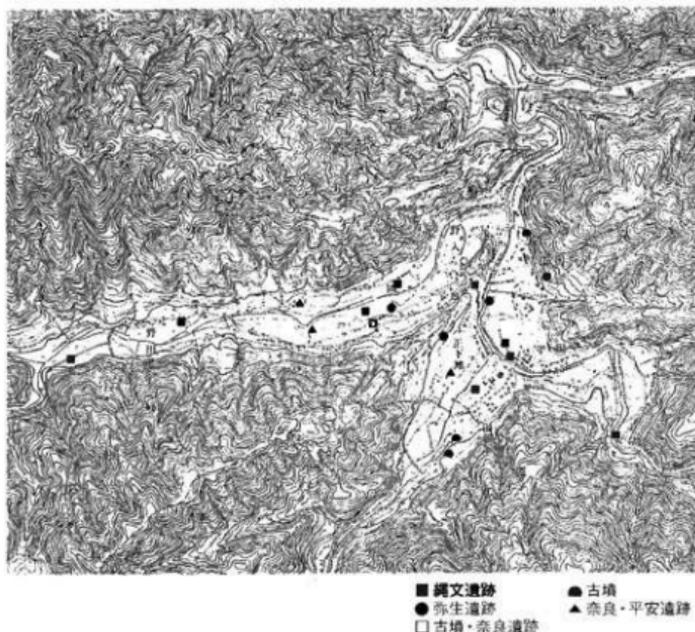
発掘地点俯瞰

ことに平家の落人であるという伝承に付き纏われて語られている。それは猫藪地を拓いて苦しめてきた人々の彼地(都)への憧れであり、貴種の後胤という自尊心を描きつけねば挫折しそうな、山間地の生活がそこにあったから生れてきたものであろう。中世といえ、該地は「匹見別府」という称名で散見されているように平安末期・鎌倉期に成立した国司によって開墾を認めた所でもあった。したがって、そうした時期に係わる青磁・白磁などの遺物も発見され、長グロ遺跡・筆田遺跡では、古代にかけての山村小集落ともいえる10数軒の正形・長形竪穴住居も存在していた。しかし水稲農耕を主体とした社会にあって狭小な可耕地の該地では、遺跡数からみても繁盛しなかったと想像される。それは先行する古墳期にもいえることで、牛首古墳・田原古墳・和田古墳などが存在しているものの、そのほとんどが山丘の尾根上・山裾部などの立地において、しかも小規模でその形態は横穴式石室系という画一形式のものである。また江田古墳群や永長山古墳群などの群集墳も分布しているが、それは川が河内状に形成された背後の急峻地に立地し、その群集墳も小円墳を中心としていることから後期のものに位置付けられ、現段階では平地に造られた円墳以外のもの、また中型以上のものは見つかっていない。これは下正ノ田遺跡などの庶民的集団の、その有力家族層の家族墓の側面をもって形成されたものということができ、その背景には、やはり生産基盤が貧弱なため、したがって生産集団が小規模であったということに尽きるであろう。

このような水稲農耕社会のはじまりであった弥生期の遺跡は、木戸開中・筆田・ヨレなどの河岸段丘の発達する開地に集中をみるが、後期に位置付けられるところの江田平台遺跡や松田原遺跡では、その立地は微高の台地に営まれているものもある。また木戸開中遺跡・塚田遺跡・半田辰美屋遺跡には前期の遺物が確認されており、2川が相会する中領地が広がる半田では、住居址とともに前期前葉の板付Ⅱ式に併行する土器などが出土したイセ遺跡がある。このように弥生文化が西方から即時にもたらされ、しかも水田ノ上遺跡で発見された初層的な細形銅戈からは高度な水稲農耕集団が存在した、ということを示唆するものでもあろう。しかし、地形立地的に取り囲むだけの包容があったかについては疑問が残るものの、そこには先行する立地的に優越した狩猟採集社会の温存が大きな吸引力を発揮したのとも考えられる。おそらくその交易ルートは、既存の“縄文の径”であった。中国山地を南西―北東に数条が併走する断層谷筋であったに違いないであろう。

狩猟採集を基調とした縄文人たちにとって、落葉広葉樹帯に覆われた該地は見逃すことができ得ない好地であったはずである。彼らにとっての96%にも及ぶ拡大な林野は食料を供給するエリアであり、また流域を中心とした4%の平地は回帰的定住のための生活域の場であった、と想像せねば余りにも河岸段丘面に復合集中する遺跡群の理由付けができそうもない。このような食料供給源であるブナ・ナラ林文化を背景に、一方では中期的潜在の上から、彼らは石を用いて精神的なモニュメントを築いたのである。それは死者の霊の乗り物としての鳥型土製品が出土しているヨレ遺跡な

どの晩期における配石遺跡群であり、円盤型線刻土製品や玉類・土偶などの呪術具を伴って明らかになった環状列石の水田ノ上遺跡であろう。こうした“配石文化”ともいえるものは、後期に位置付けられるイセ遺跡や石ヶ坪遺跡にも存在するが、それはおそらく自然界で再生を繰り返す落葉広葉樹帯で感得しえた造形品であって、東日本からの西進文化ともいえそうである。しかし、複合する石ヶ坪遺跡では、その下層に中期終末の生活があって、そこには滑石混入土器である多くの阿高式系がみられ、九州人の移動と解される状況を窺わせる。こうした交流は山隔、ことに九州との結び付きが高く、前期も複合する新楸原遺跡では、轟式系の土器と相俟って乳白色の姫島産の黒曜石などが見つかっており、全般的に日本海側とは極めて希薄であったと想像される。その新楸原遺跡は、中国脊梁山地中の2川が相会する河岸段丘面において、該地の遺跡中最も高い位置にあり、早期の土器あるいは先土器時代の刃器も層位的に発見されている。ことにナイフ形・横長割片系をはじめ、それらに先行するという8層の始良火山灰層から見つかった縦長割片の出土は、該期における人跡を確実にしているとともに、系譜を辿る上からもきわめて貴重であったといえるだろう。



第1図 匹見中央部における主な遺跡

第2章 下手地点

1. はじめに

下手地点は美濃郡匹見町大字匹見イ734ほかに所在し、比高差約10m図って北北西流する広見川の河岸段丘が形成されている右岸に立地する（発掘地点俯瞰・第3図）。

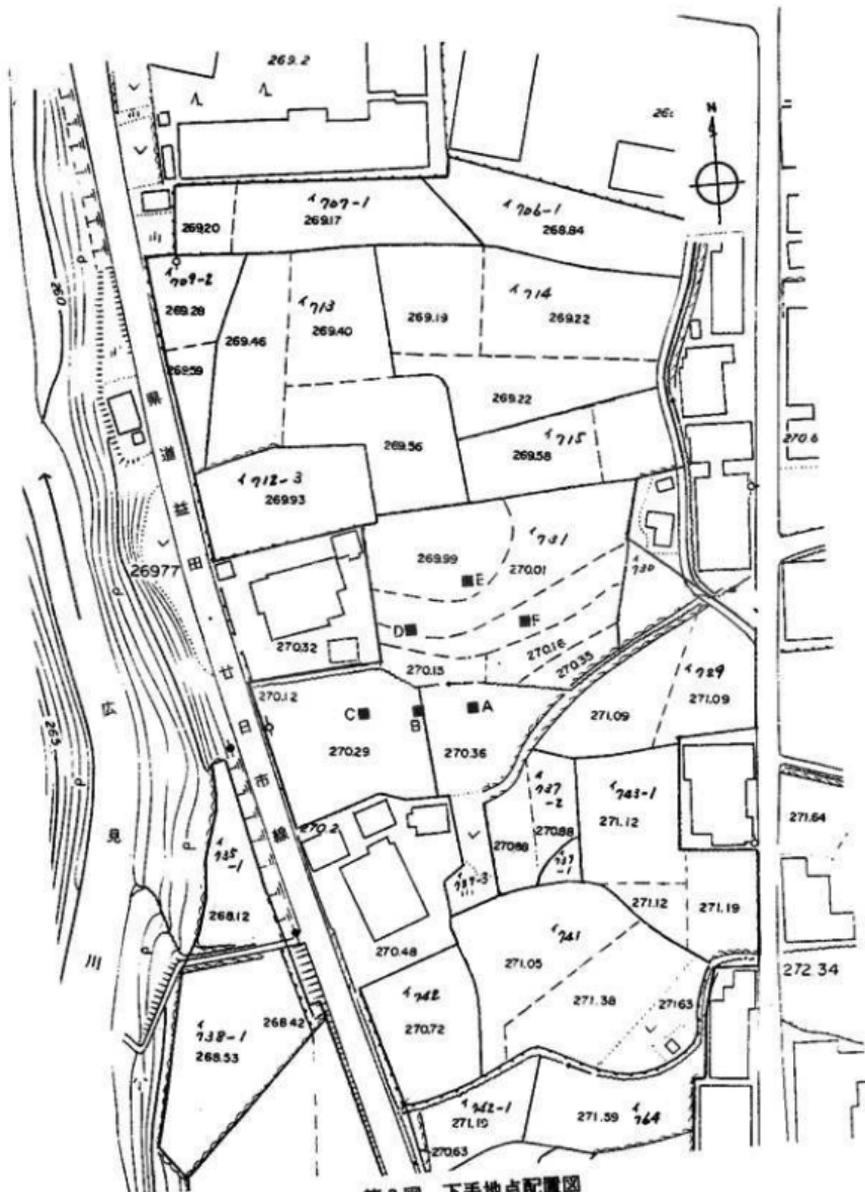
その地点は河岸端に沿う県道益田甘口市線と、河岸段丘の中央を併行して貫道する町道神原線との間の比較的平坦な水田地に存在する。なお標高約270.34m測る本地点は、南南東の上流側が標高約270.54m下流側は約270.14m測ってその高低差約40cmある。

本地点を調査対象地としたのは、以前町道神原線の側溝工事の折、縄文土器が数片発見されたことにより、隣接する当地点を選定したものである。

調査は、平成3年11月5日から同年11月14日のうちの6日間、61人役を費して行った。



第2図 下手地点位置図



第3図 下手地点配置図

2. 調査の概要

調査区の設定 水準計測は、県道益田廿日市線路上にある補助点に求め、それから調査対象地の南側の畔畔に移すことから始めた。

まず最初の調査区は、やや標高の高い調査対象地の南側（上流側）に2mの方形区を磁北方向に任意に設定した。これをA調査区とし、B調査区は西側（広見川側）に8m測った地点、さらにC調査区はB調査区から8m西側に測った地点に設定した。またD調査区以下は、北側の40cmばかり

遺構計測表

調査区名	遺構	長径	短径	深さ	検出面標高
A調査区	P01	— ^{cm}	33 ^{cm}	23 ^{cm}	270.00 m
	P02	34	28	9	270.00
	P03	34	28	28	270.00
	P04	—	36	27	269.99
	P05	26	24	16	270.00
	P06	24	20	13	270.00
B調査区	P01	24	—	11	269.96
	P02	—	—	21	269.96
	P03	52	—	13	269.96
	P04	—	12	12	269.96
	P05	23	10	6	269.97
	P06	10	6	—	269.97
	P07	11	—	3	269.97
	P08	38	22	22	269.94
	P09	15	14	9	269.94
	P10	—	16	5	269.94
F調査区	P01	26	26	10	269.65

一段低い地点域に設定することにした。まず、D調査区はB調査区から磁北に13m測った地点、E調査区はA調査区から磁北に向かって20m測った地点とした。さらにF調査区は、A調査区から磁北に13m測り、その地点から東側に10m測った地点に2m方形区を設定して全体を把握するよう努めた（第3図）。

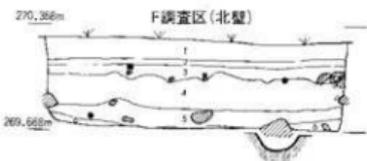
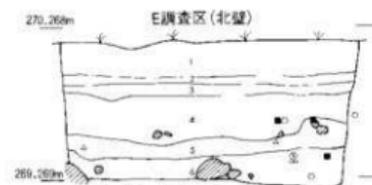
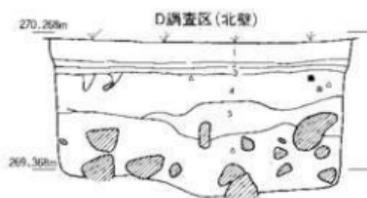
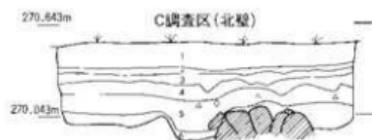
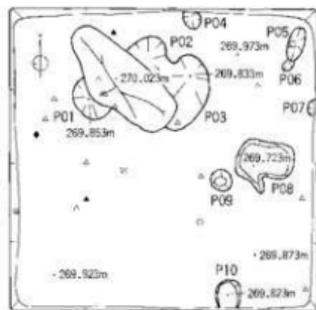
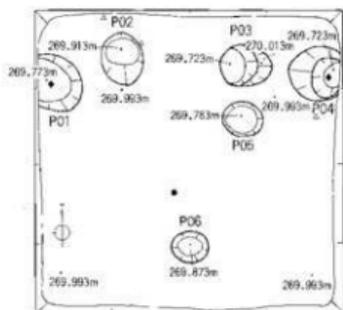
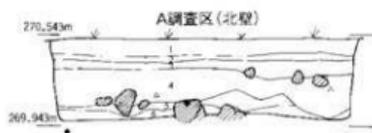
調査区名は、A調査区を中心にアルファベット順に右回りに呼称することにし、したがって調査面積は24m²ということになる。

実測の概要 調査は、後世の人為が加えられたと想定される1・2層を除き、層位的に確認するとともに、平面及び標高も計測しながら点数ごとにとり上げて行った（第4図）。

3. 層序と各調査区の概要

基本土層と層序 本地点における基本的な層序は、1層の黒灰色した表土の水田耕作土。2層は2cm入の石粒を含んだ砂質性の客土（灰褐色土）。3層は酸化鉄分を含んだ茶褐色土。4層は有機質の黒色土。5層はやや砂質性の暗褐色土。6層は基盤層の黄褐色砂礫層から成る（第4図・図版1-2～図版2）。

そのうち3層は色調から分層しているものの、土質的には4層と同一的なものとして捉えられているものであり、また砂礫層である6層においては、地点の北西側と南東側とでは色調的に異なる。つまり、表土から基盤層までが全体的に薄層である南東側では、6層の基盤層が黄褐色を呈しているのに対して、北西側では黒色の砂礫層からなっている。これは基盤層が南東面より下降している



- A・B・F 調査区
 1層. 耕作土(黒灰色土)
 2層. 客土(20cm大の礫を含む灰褐色)
 3層. 茶褐色土(酸化鉄を含む)
 4層. 黒色粘質土
 5層. 暗褐色砂質土
 6層. 黄褐色砂礫層

- C・D・E 調査区
 1層. 耕作土(黒灰色土)
 2層. 客土(20cm大の礫を含む灰褐色)
 3層. 茶褐色土(酸化鉄を含む)
 4層. 黒色粘質土
 5層. 暗褐色砂質土
 6層. 黒色土(礫を含む)
 7層. 黄褐色砂礫層



- 凡 例
 △ 養生土層
 ▲ 腐文土層
 □ 埋設物
 ■ 打製石片
 ○ 割片
 ● 石核
 ⊙ 石斧丁
 ⊖ 炭煤石
 ◆ 炭化物
 ⊕ 溝口

第4図 下手地点土層断面図

ために層厚が全体に厚く、また下層において湿質を呈している状況から判断すれば、4層あるいは5層の色調が砂礫に浸移したものと判断される。

各調査区の層序状況 地点の南東側に設定したA・B・F調査区では計測はしなかったものの、2層・3層直下から数十点の陶器が出土した(第5図1～6・図版4-1)。またC調査区を除き、とくにA・B調査区では4・5層がきわめて薄層で、起伏する。この起伏は四周するセクションを見る限り既掘の4層で見逃していると思われるが、5層下面に検出された遺構と存続する層界線を呈しているように捉えられた。

本調査区内での中心をなす弥生土器片等の遺物は、層厚5～20cmを測る砂質性の暗褐色土層(5層)に出土し、その下面に柱穴らしき遺構も検出されている(遺構計測表)。また遺構が掘り込まれた6層は、上面が砂粒・石粒であるが、下面面に向けて挙人以上の円礫を含む河床礫の様相を呈し、遺物は出土していない。

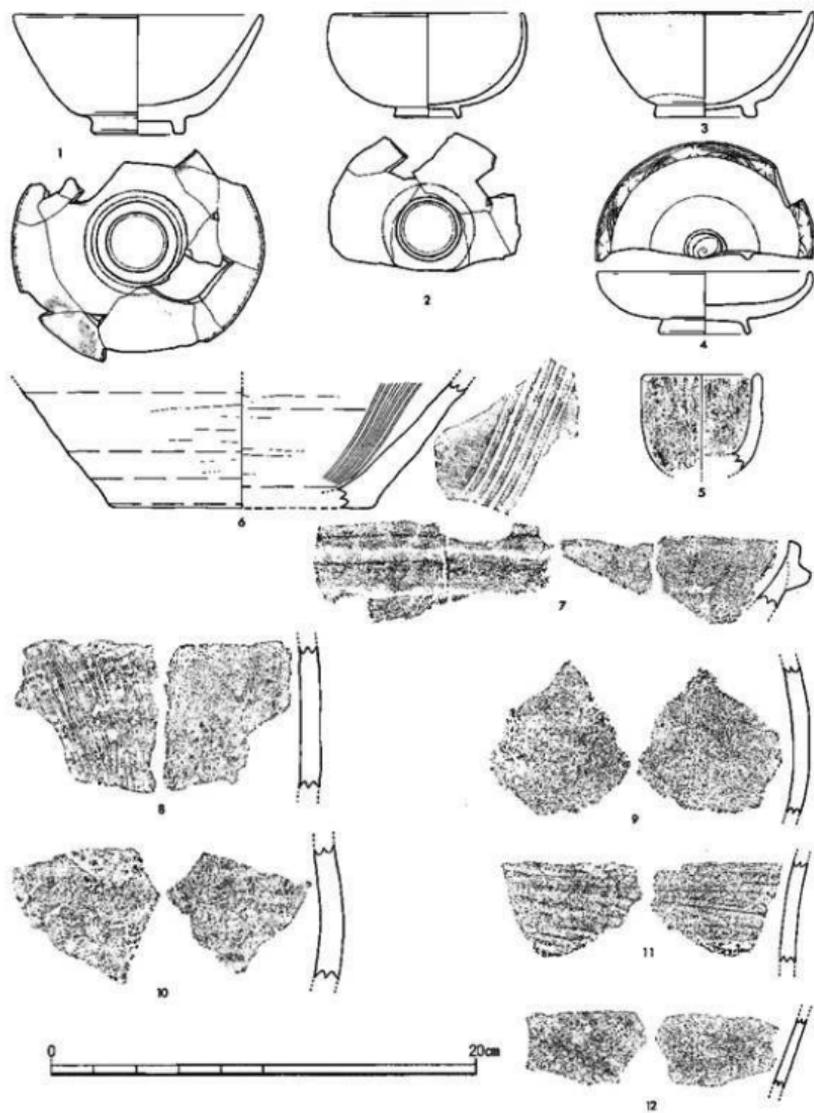
北西側のC・D・E調査区では、南東側の調査区に比べて土質は潤湿的であり、また層序において6層の砂礫を含んだ黒色土が加層している。したがって、これらの調査区では同様な層序を呈しているが、西端に位置するC調査区は層序高、あるいは出土状況からは南東側の調査区に類似する。またD・E調査区では、砂礫を含む6層の黒色土が17～50cmを測って深層のため、全体の層序高は高く、局地的な潤湿地であったことを窺わせる。この両区における遺物の分布は、D調査区では3層に2点の弥生土器、各1点の石核・石材が出土した。またE調査区では、5層の暗褐色砂質土に6点の弥生土器、4層の黒色粘質土に打製石斧3点、1点の石器剝片が出土したが(第4図)、遺構については確認することができなかった。

4. 出土遺物

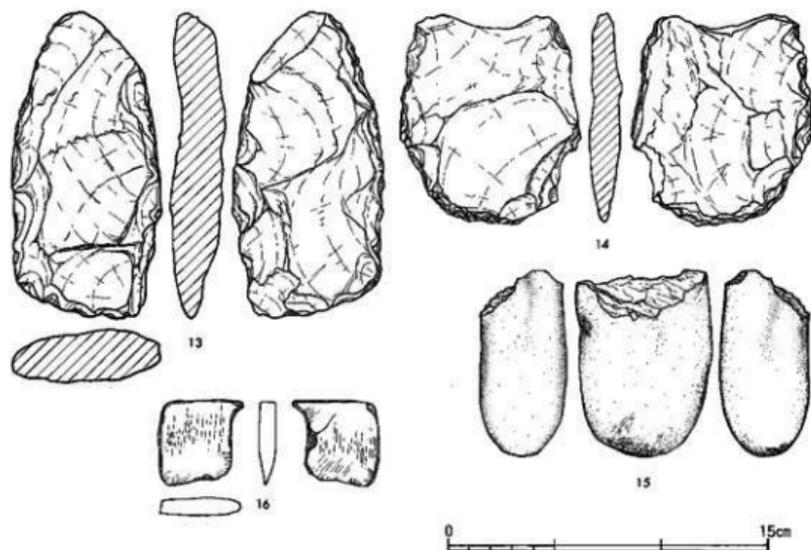
出土遺物の概要 本地点では、陶磁器片47点・弥生土器片44点・瓦器12点・縄文土器片3点・羽口2点・須恵器土師器片各1点。また石器類では、石器剝片31点・打製石斧6点・石核3点・礫石3点・敲石1点・黒曜石片1点が出土している。他のものとしては、炭化物3点・鉄器1点合せて約170点のものが検出された。

これらの出土状況を層位的垂直分布からみると、凡そ陶磁器類はB調査区の2層(客十)を中心に出土し、弥生土器は南西側のA・B・C調査区を中心とした暗褐色土層に出土している。また打製石斧などの石器類は、D調査区を中心に東側の黒色土に出土しており、弥生土器の出土層と対比して逆転的層位がみられる。これはおそらく東面の山裾側の流入土と考えられる。

出土遺物 (第5図・第6図・図版4) 1～4はB調査区の2層(客十)に出土した近世の陶磁器類。そのうち1は、淡緑色の釉に永裂状の貫入がみられ、部分的に鉛色の飛釉がみられる。2は、



第5图 下手地点实测图I



第6図 下手地点実測図Ⅱ

薄手のボール状の壺で、京焼風。3は、1と同様の萩焼。いずれも高台・底面外面は土見仕上げ。4は、外面に厚い青磁、内面外縁々は鼻須による半円弧状の多条線を施した肥前系の蓋と思われるもの。

5はF調査区の3層に出土した羽口。胎土は粗荒で、灰褐色を呈し、内外面に漆黒色した溶鉱分が部分的に付着する。6は、陶磁器類と共伴した備前焼の播鉢。外面は淡茶色、内面は青灰色を呈し、胎土に石粒を含む。内面に5条の角ばった刻みが施され、平底である。7～10は、弥生土器。そのうち7は、B調査区の5層に出土したもので、縁外面に突帯をもった浅鉢系のもの。内外面ともナデを施すが、突帯下半はケズリと思われる。色調は橙褐色で、胎土に多くの金雲丹を含む。8は、外面にハケ目、9はナデ、10はケズリを施し、いずれも淡橙～橙褐色を呈する。11～12は、B調査区の4層から出土した精製土器。そのうち11は茶褐色、12は暗褐色を呈する。両者とも内外面をヘラで精緻に磨いている。

13～15は石器。そのうち13は、E調査区の4層に出土した打製石斧。石材は玄武岩で、周縁部を粗く整形する。14も同じく打製石斧で、基部が半折した安山岩製のもの。15は、砂岩系の河原石を利用した敲石。頂部に敲痕がみられる。16は、粘板岩質の石包丁片で、C調査区の弥生土器と共伴して出土したもの。

第3章 和田地点

1. はじめに

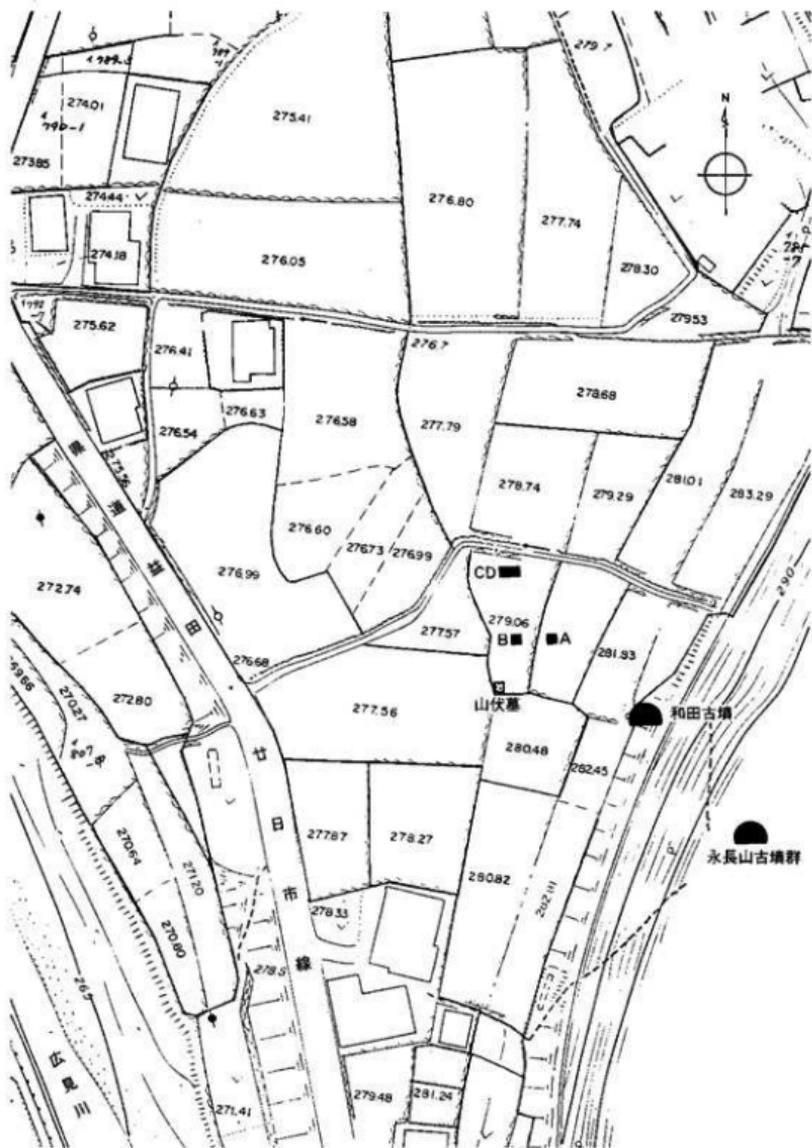
和田地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字匹見イ803ほかに所在する。

本地点は、西中国山地の最高峰、恐羅漢山(1,346m)に源を発した広見川がV字峡谷をつくって南西流した後、谷盆地の相会地で北西に変流する扇頂地の右岸の山裾に立地する(第7図・第8図・発掘地点俯瞰)。そのため、緩傾斜地に伴って段状の水田が広がっている一方で、背後(東側)には989mを測る鈴ヶ岳の急斜地がせまっている。そうした立地にもかかわらず、本地点を調査対象地として選定したのは、まず「山伏」と称される遺跡が存在しているということ。その上、10m南東側には時期的位置付けが把握されていない周知の遺跡である和田古墳があることから、よって何らかの根拠も抽出できるのではないかという期待のもとに設定したものであった。また、和田古墳の南東50mの急斜地の段丘面には、比高差約30mを測って分布する永長山古墳が存在する(第7図・第8図)。

なお、調査は、平成3年11月19日から同年11月29日のうち7日間、58人役を費して行った。



第7図 和田地点位置図



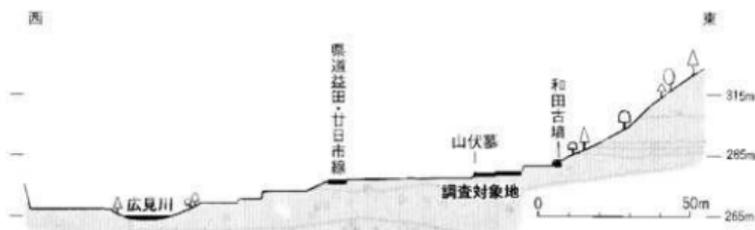
第 8 図 和田地点配置図

2. 調査の概要

調査区の設定 山伏墓の存在する調査地点は、現地表面標高約279.06mを測る水田耕作地の畦畔に存在する（第8図・第9図・図版8）。

調査は明白な山伏墓は別にして、2段からなる調査対象地（約440m²）内の水田地に、2mの方形区を設定することから始めた。まずA調査区と称するものを、約60cm測って1段高くなっている水田地の南西側に磁北に向って、任意に設定した。そしてB調査区と称するものは、A調査区の西杭から西側から4m測って、1段低い山伏墓の水田面に2mの方形区を設定。さらにC調査区は、B調査区の北杭から磁北に向って10m測った地点に設けた（第8図）。しかし掘削の段階（4層直下）で、C調査区において手応えのある出土遺物がみられたので、さらに2m方形のものを東側に継続し、調査区名もCD調査区と改めた。したがって、調査面積は16m²ということになる。

実測の概要 調査は水田耕作土の1層、客土の2層に含有する遺物は実測せずにとり上げた。しかしそれ以下は、層位を確認するとともに、各点数ごとに平面および立面的分布も捉えながら実測した（第10図）。



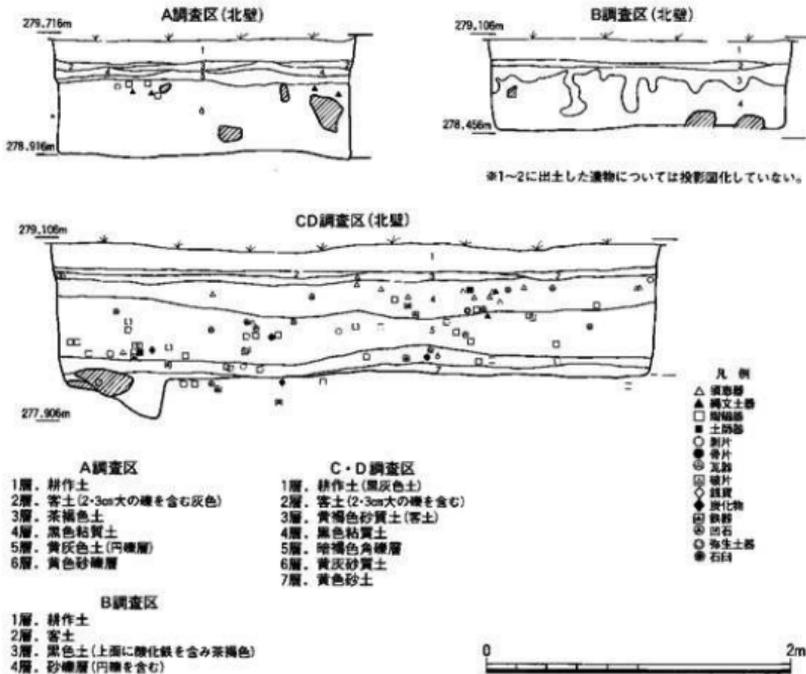
第9図 調査地点地形断面図

3. 層序と各調査区の概要

基本土層と層序 本地点における基本的層序は、1・2層除いて遺物が出土しなかったB調査区に表出されていると想定される。つまり黒灰色した1層の耕作土。2層は、2～3cm大の礫を含んだ水田の床土としての客土。3層は有機質からなる黒色土（上面に赤褐色した酸化鉄が部分的に浸着しているもの、土質的には包括できるもの）。4層は、10cm大から人頭大の円礫を含む砂礫層（河床礫）からなっている。

A・CD調査区の層序状況（第10図・図版6～図版7-1） A調査区は上段の水田地に設けた

もので、現地標高約279.67mを測る。1層の水田耕作土は、約15cmを測り、ほぼ水平である。2層は水田の床土としての客土。灰色を呈し、やや砂質性で2～3cm大の礫を含む。北壁をみるかぎり部分的に尖滅しているが、南半側は3～6cmの層厚を有する。遺物は3層にかけて数点の陶器が出土している。3層は、酸化鉄が沈着した茶褐色土で、色調から分層しているもの十質的には4層に包括できるもの。黒色粘質土の4層は、厚部で7cm、尖滅部分もあり、全体に薄層である。土質的に類似する3層を包括したとしても12～15cm程度である。遺物としては、下位面を中心に縄文晩期に位置付けられる土器片及び、石器剥片が数点出土している。5層の黄灰色土はやや砂質性で、少数ながら10cm大の円礫を含む。層厚は3～12cmを測り、下面の層界はほぼ水平である。6層は、1・2cm大の石粒を含んだ砂礫層で、実質的な河床礫としての基盤層である。5・6層とも遺構・遺物は検出していない。



第10図 和田地点土層断面図

現地表面標高約279.06mを測る下段の水田地に設けたCD調査区は、遺物の出土状況から、さらに西側に2m方形を拡張したものである。その1層は、層厚12~16cmを測る水田耕作土。2層は客土で、2~3cm大の礫を含んだ灰色土。また3層と層序した黄褐色砂質土も、2層を填補的に併進する状況からみて土質・色調は異なるものの、床土としての客土と想定される。本層からは2点の銭貨が出土した。4層は、黒ホク土の黒色粘質土。層厚は10~24cmを測り、西壁に向かって上昇し薄くなっている。遺構は検出していないものの、13点の須恵器、3点の瓦器、2点の鉄器などが出土した。5層の暗褐色土は、10~30cm大の角礫を多く含み、崩土的で粗荒である。層厚は20~40cmを測り、両壁（西・東）に向かって次第に厚くなっているが、南壁に向かってはやや薄い。土層の締まり状態の粗荒からみて、水田開墾時の搬入土（客土）と想定される。そのことは、30片余り出土した近世的陶器の出土が証明しているといえる。したがって、各上位層も水田開墾時の搬入土とみた方が妥当であろう。殊に上位層での須恵器等が出土する黒ホク土などは山土の公算が強く、至近の山裾の段地に立地する古墳周辺の土壌とも考えられる。こうした搬入土による攪乱の層序は、傾斜地という立地あるいは遺構の皆無遺物の出土状況等から把握できそうで、おそらくA調査区においてもその可能性があろう。6層は、やや粘性の黄灰砂質土。層厚は北壁をみるかぎり7~10cmを測り、北半に陥入する。遺物・遺構とも検出されていない（第9図の遺物投影は、5層下面の下垂した層界面に出土したもの）。7層は石粒を含んだ黄色砂土で、遺物・遺構らしきものは検出しなかった。

山伏墓の調査概況（第11図・図版8）「山伏墓」（やまぶしぼか）と呼ばれているものは、地区の人たちによる通称である。その山伏墓は、南面及び西面を石垣で造成された水田地の南西端に存在する（第8図・第9図・図版8-1）。山伏墓に沿う石垣の南面は、耕作面から約1.6mを測って積み上がり、一方の西面側は約1.5m測って石垣で陥ち入っている。

基壇は、石垣に沿う南面は別にして、東・北・西の3方を15~40cm大の石体で長方形に廻らしている。角部にあたる石体は粗いながらも整形し、石体間の空隙に小石を詰めている。その基壇部の地表高は約35cm、地下高は3~6cm。基段の長径1~1.1m、短径は68~73cmを測る。基段内には10cm大の角礫を含むものの大半は黒灰色小礫土を詰め、上面には15~20cm大の板状の角礫を疎間的に敷く。また、基壇に立つ立石（墓標）は板状の長方形のもので、地表高約26cm、地下高約17cmで、その最大厚約18cm、最大幅約37cmを測る。東一西に幅をもつ形状の立石（墓標）から、正面は北側に向かって整えたものと想定される。

基壇及び地表下の実測は、東一西を軸として半截方式で行った。

長方形に周縁石を配置した基壇の内側は、2~5cm大の礫を多く含んだ黒灰色土を詰め込み、その埋土は基壇下面から西に偏在して、半円弧状（西面の石垣に沿うため）の十坑で陥入する。その坑底部はやや袋状を呈し、基壇下面から約30cmを測る。遺物らしきものは出土しなかった。その下

位層は、黄灰色した砂土が4～10cm測り、西面の石垣方向に傾斜して堆積する。頭初、本榎が地山認識したが、下位層に山土と思われる黒色土の出現によって、また本地点の層序関係（開墾時の擾乱と想定される）、あるいは石垣面という状況から部分的な搬入とみられる。その下位層の黒色土は、西面の石垣に沿って広がっており、やはり開墾時の人為的要素が強いと判断された。両層とも遺物は出土しなかった。

これらのことから遺構と想定できるものは、立石（墓標）及び基壇、黒灰色小礫土からなる土坑（塋）ということになる。しかし基壇に対して土坑

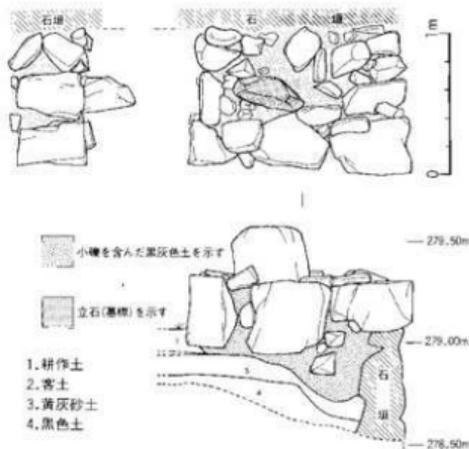
はきわめて小規模であることから、むしろこの土坑は基壇の掘置の土坑とみた方が良いかも知れない。したがって、本遺構は出土遺物の皆無等も加味して考えるならば、他地点からの動移されたものとみる方が妥当であろう。

4. 出土遺物

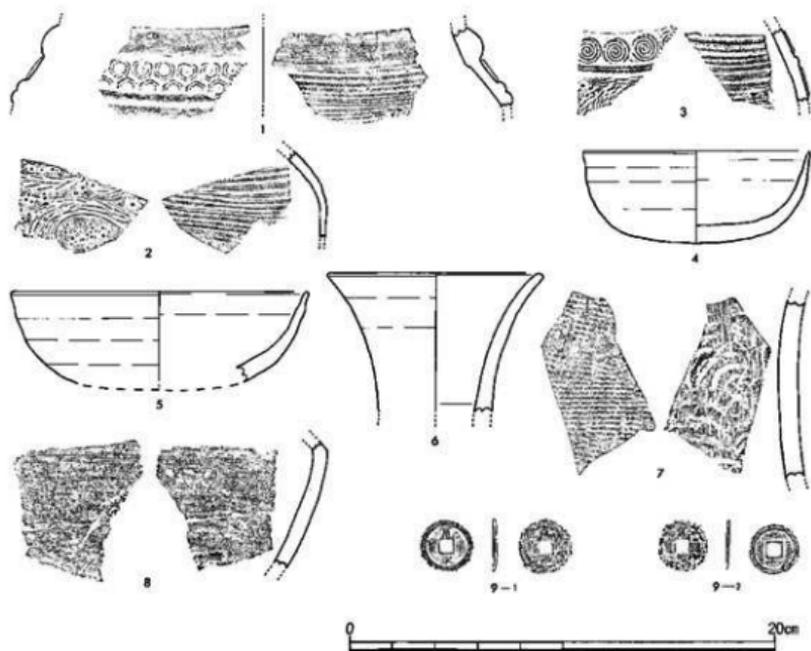
出土遺物の概要 本地点から出土した遺物の内訳はつぎのようになる。

	陶磁器	瓦器	須恵器	縄文	鉄器	炭化物	銅片	銭貨	石斧	凹石	土師器	骨片
A 区1～2層	9点	10点							1点			
3～4層	3点			4点			1点					
B 区1～2層	5点											
CD区1～2層	25点		1点				3点					
3～5層	23点	6点	7点		4点	3点	2点	2点	1点	1点	1点	1点

これらのことから本地点では、まず近世の陶磁器の出土が多く（瓦器と分類したものも同時期と思われる）、次いで土器片は少ないものの石器銅片などの縄文遺物、そして歴史時代転換期（7世紀後半）の所産と考えられる須恵器などに時期区分することができる。しかし、とくにCD調査区において抽出されているが、層位的垂直分布状況は必ずしも常規とはいえない（第10図）。おそらく



第11図 山伏墓実測図



第12図 和田地点実測図Ⅰ

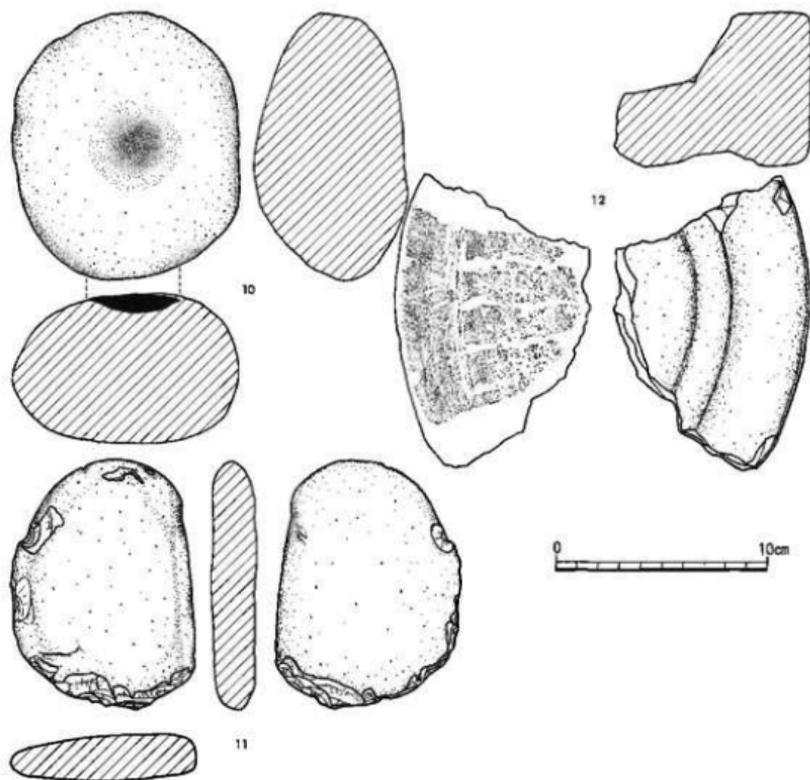
傾斜地という立地性から崩土，あるいは水田開墾時などによって攪乱を呈したものと想像される。

出土遺物（第12図・第13図・図版9） 1～3は，CD調査区の4層から出土した瓦器質系の火鉢。外面に木型による亀甲文・草形文・渦巻文が施され，内面には凹線状の筋描文がみられる。

4～7は，3層から4層にかけて出土した須恵器類。そのうち4・5は坏身で，前者は口径10.8cm後者は14.2cmを測る。両者とも粘土も真が顕著で，底部から丸みをもって開き気味に口縁部に至る。切り難しはヘラ切りで，内外面の底面は横ナデ，体部は回転ナデを施す。両者とも外面は淡青灰色，内面は灰色を呈する。6は，長頸壺の口縁部。胎土に砂粒を含み，内面は灰色，外面は黄褐～灰褐色の自然釉が付着する。7は，外面に櫛描文様，内面は同心円文のタタキ目文を施した須恵器片。外面は淡青灰色，内面は白灰色を呈し堅緻である。8は，A調査区の4層黒色土に出土した浅鉢系の縄文土器。外面をヘラ磨きし，内面はヘラケズリ。胎土に砂粒を含み，色調は橙褐色を呈する。9-1・2は，CD調査区の3層に出土した銭貨（図版7-2）両者とも「寛永通寶」と印

影されている。

10～12は石器類。そのうち10は、CD調査区の4層下位面に出土した凹石。石材は砂岩で、平面頂部に敲痕らしき径約4.5cm、深さ約0.8cm測る凹みがみられる。11は、流紋岩系の河原石を利用した土堀具形の石器。刃部面に整形したと思われる剝離痕がみられる。12は、砂岩質による石臼。



第13図 和田地点実測図Ⅱ



1. 南西からみた下手地点近景



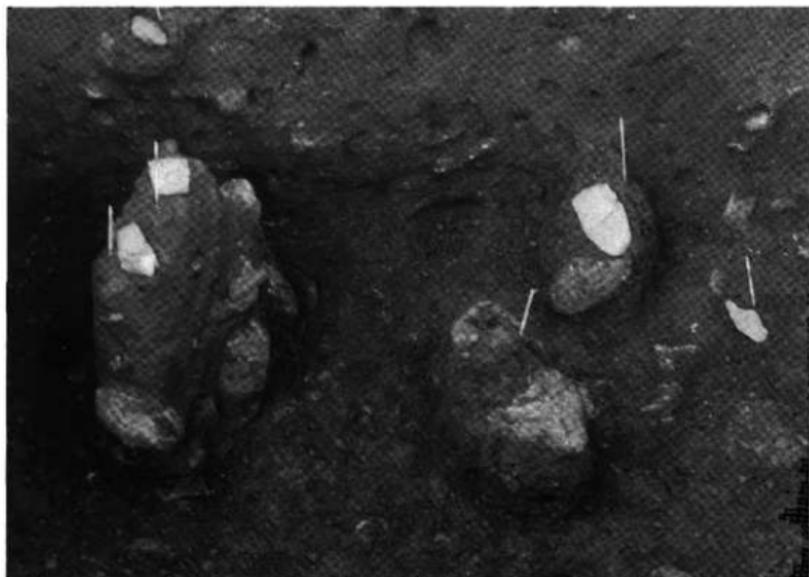
2. A調査区北壁



1. B調査区北壁



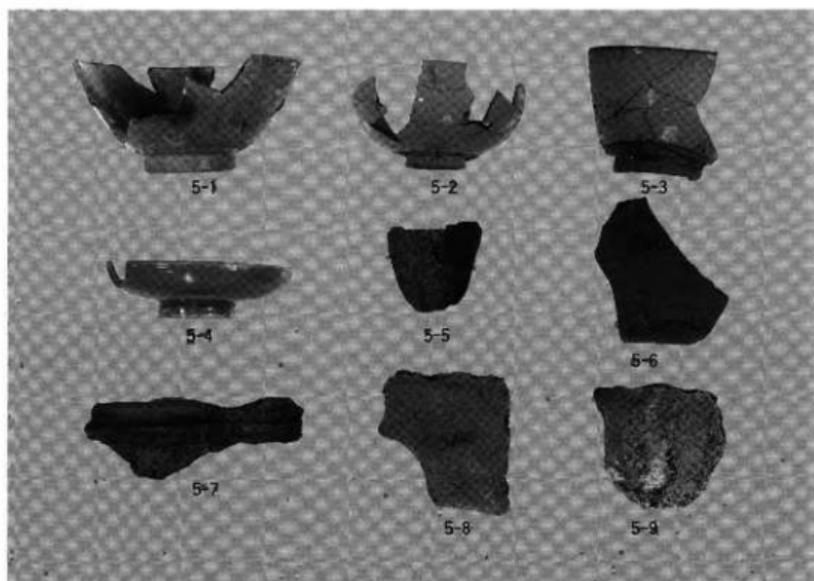
2. C調査区北壁



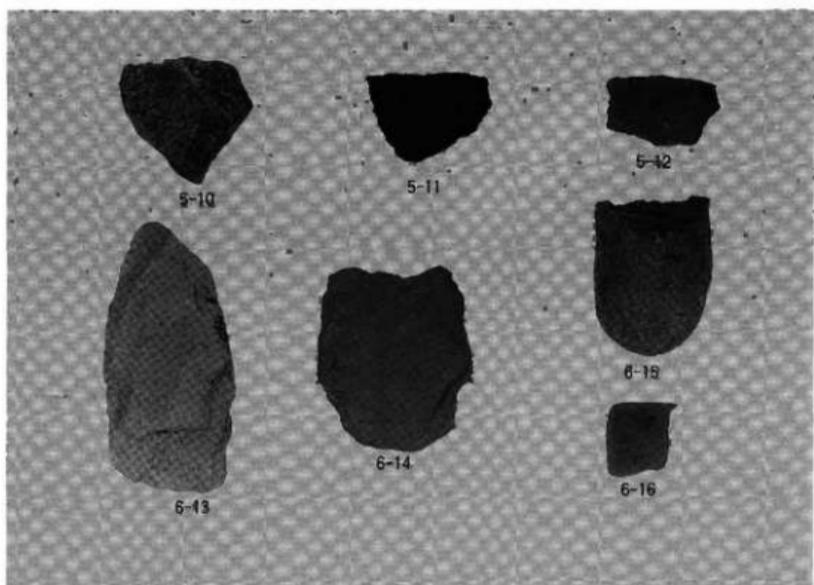
1. 遺物出土状況(E調査区)



2. 遺構検出状況(B調査区)



1. 陶磁器・羽口・弥生土器



2. 弥生土器・打製石斧等の石器



1. 南西からみた和田地点遠景



2. 南東からみた発掘地点の調査区



1. A調査区北壁



2. B調査区北壁



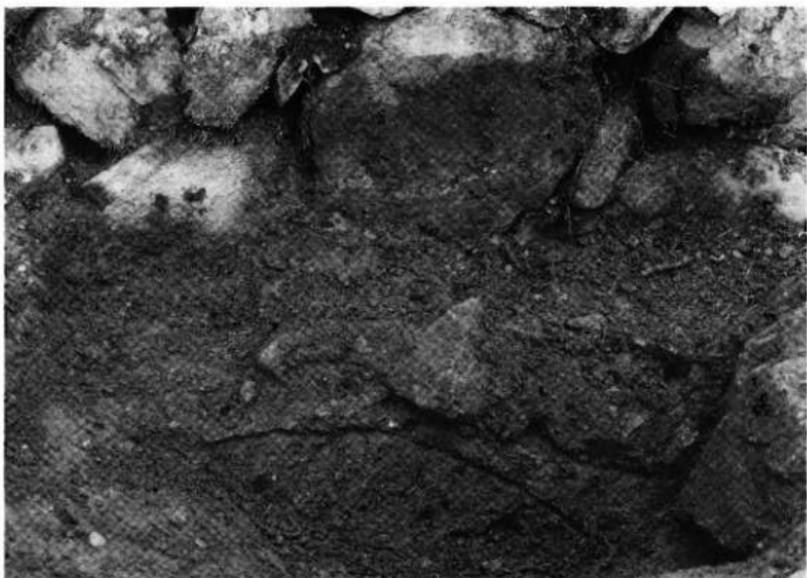
1. CD調査区北壁



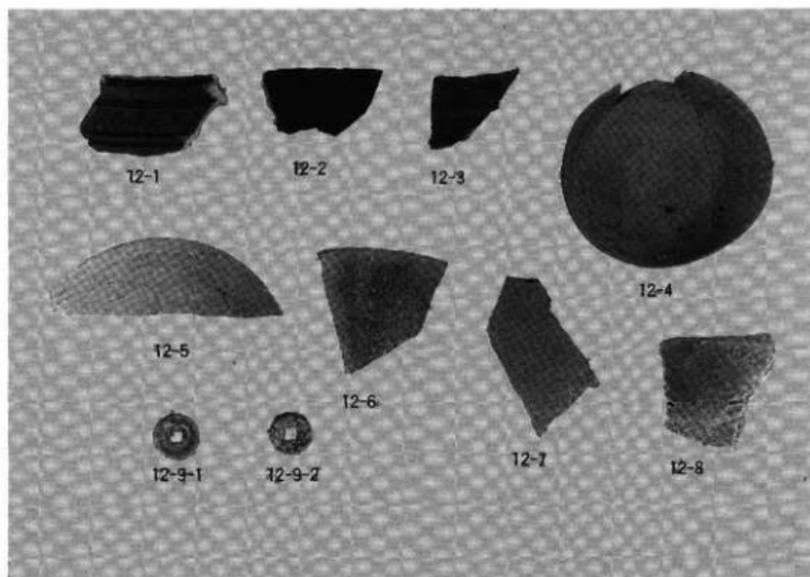
2. 錢貨出土状況



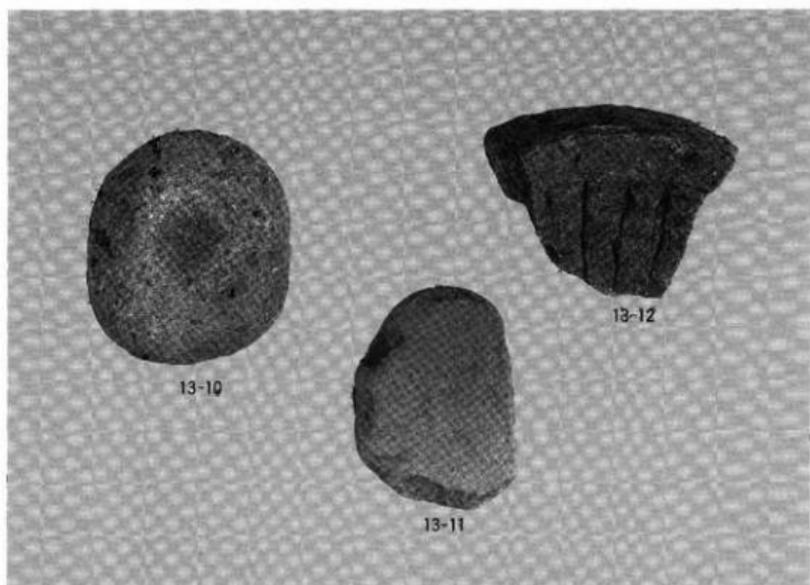
1. 北側からみた山伏墓



2. 山伏墓の土坑状況



1. 瓦器・須惠器・縄文土器・錢貨



2. 凹石・石臼・礮器

平成4年3月10日 印刷

平成4年3月30日 発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ

発行 匹見町教育委員会

島根県美濃郡匹見町41260

印刷 有限会社 谷口印刷

島根県松江市母衣町89
